

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04777

研究課題名(和文)エデュテインメントの要素を取り入れた年少者用英語学習ツールの開発と応用可能性

研究課題名(英文)Development and Application Possibilities of Edutainment Learning Tools for Young Learners of English as a Second Language

研究代表者

生馬 裕子 (IKUMA, YUKO)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：60549088

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：基礎資料の拡充を行うことができたが、幼児のデータについては定量的な分析を行うのに十分な質・量を蓄積することができなかつたため質的検討に留まった。今後改善を加えた新たな方法論のもとと追究を継続したい。開発したデータ収集・集計用ツールを改良したが、ツールの効果検証は継続する必要がある。生活や遊びの中で学ぶことを特徴とする年齢の低い学習者についても、これまでに実施した小学生や成人学習者を対象とした外国語音声の知覚・学習と同様の傾向を観察した。協働的・競争的な仕組みを取り入れ、認知的・非認知的能力を刺激し学習対象を視覚提示・聴覚提示したりすることにより学習対象に積極的に関わり習得が進む様子が観察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、先行する取組により基本的な方法論や枠組みが構築されている小学生の英語学習に関する知見について、より低年齢の学習者に対する教育効果の検討を加え、子どもにおける英語学習の効果を包括的に検討しようとした点である。また、社会的意義は、研究途上で開発されるツールを含め、英語教育の教材と教授法を提供し、現場の授業へすぐに役立てることが可能である点である。つまり、学習方法に関する知見が、研究者の勤務先における教員養成・教員研修などの場で役立てられることに加え、開発ツールは実験データ収集用のみならず家庭学習課題の提供や管理ツールとしても用いることができ、現場における利用の可能性も期待される。

研究成果の概要(英文)：The quantity and quality of the basic data from younger students' second-language-learning were expanded; however, we need still much more large-volume data from preschool pupils for quantitative estimation of the learning effects. The data collection and analysis tools were developed and improved based on the teaching experiences and the results of questionnaire/interview surveys; however, we need to continue to re-estimate the effectiveness among more participants, teachers. For the foreign language speech perception/learning on younger learners, who are characterized by learning in their daily lives and plays, the researcher observed the similar tendency as that on elderly elementary pupils or adult learners. It was observed that younger students were actively involved in the learning objectives by incorporating a collaborative and competitive atmosphere, stimulating cognitive and non-cognitive abilities.

研究分野：英語教育

キーワード：小学校外国語教育 教材開発 外国語学習歴 幼児における言語学習

1. 研究開始当初の背景

知識の習得を教室外でオンラインにて学習者が各自で個別に行い、教室での一斉授業においては事前にオンラインで学んだ知識の確認や拡張、応用のためのアクティブ・ラーニングを行う「反転授業」が新しい教育形態として報告され、いくつかの成果を挙げている (Baker; Lage; Bergman & Sams, etc.)。日本においては、高等教育現場における活用事例が先行し(東京大学、島根大学、山梨大学、etc.)。一早く中等教育にタブレット端末必携を義務付けて実践を開始した近畿大学附属高等学校の英語・数学での活用事例も脚光を浴びた。初等教育において1人1台のタブレット端末を貸与して先進的 ICT 利活用教育を推進している代表的地域の一つに佐賀県があるが、初等・中等教育段階および特別支援学校の教諭らとの議論を通し、反転授業の可能性に期待を寄せながら、機器やツールを試行錯誤しながら用いている。また保育園におけるタブレットでの教育展開(例: 聖愛幼稚園等) 保護者との連絡や園での活動報告などの業務管理も進んでいる(例: コピーリススクールよしかわ等) ことに加え、遠隔地における教育の機会や多様性を担保するツールとしてのタブレット及び関連アプリケーションに対する期待や可能性も広がっている。

これまでに実施してきた、小学生や成人学習者を対象とした外国語音声の知覚・学習実験に関する結果から、音声技能面の学習は1回あたりの学習時間が短時間であっても集中的・継続的に学習を行うと向上することや、協働学習あるいはエデュテイメント(教育 education と娯楽 entertainment を合わせた造語)の要素を取り入れた学習をペアやグループ学習などの場で導入すると、その後、個別学習として実施した際にも学習意欲を高く保ったまま学習に取り組む可能性が高いことが確認された。その一方で、自宅等での学習体験の影響(個人差)も大きく、いかに授業外の時間を活用して限られた授業時間の中で高い効果を発揮させるかが課題であった。特に、理解・産出(発話)の能力の習得・向上に影響する要素について探索的に調査するために、小学生に対して、授業内外での学習歴・学習体験のデータを含めた児童の個人的外国語接触経験プロフィール、学習ログ、アンケート回答等の定性的・定量的データを長期的に収集した分析結果から、能力を向上させ自己効力感を高めた子どもにおいては、アンケート調査の自由記述部分にて、ポジティブな感情と繋がりが深いと示されたのは「対話者」「談話」「コミュニケーション」など、1語、1文を超えた、より大きな言語単位への関心であった。その反面、能力向上幅の小さかった子どもでは、「リスニング」や「個々の音の識別」など、より小さな言語単位や個別の能力への関心が高くなる傾向が明らかになった。

2. 研究の目的

本研究では、幼児および小学校の低・中学年の英語学習を対象とし、協働学習やエデュテイメントの要素を取り入れた仕組みの導入と、授業外学習時間の活用モデルを提案することである。幼小・小中・中高・高大といった各校種間の連携や教育の連続性を見直しの趨勢、英語科教育導入の低年齢化、モバイル端末の普及やインターネット環境の整備を背景とし、特に英語初学者段階の幼児・児童を対象とした発音・文字・語彙学習用等のアプリ開発及び学習効果・情意面への影響・現場への応用可能性について検討することを目的とした。

これまでに実施してきた、小学生における言語産出能力の学習と発達と中心とした実証研究の知見をベースに、これまで検討してこなかった文字の学習や、生活や遊びの中で学ぶことを特徴とする幼児に対する教育効果の可能性の検討を行った。認知的能力のみでなく、経験の開放性(新しいことに興味をもってどんどんチャレンジする) 勤勉性、外向性、協調性、情緒安定性といった、非認知的能力の育成が重視されている幼児教育においては特に、創造性を誘出する教育法の提案に繋がるような基礎資料の収集に努めた。

3. 研究の方法

幼児・小学生を対象として、外国語学習ツール(開発アプリ等を含む)の使用の様子の観察や教諭等へのアンケートを実施し、それらのデータ分析を通して、文字認識能力や学習に対する興味関心や幼児に対する英語教育の効果について検討した。

具体的には、下記の3つのサブテーマを設定し、それぞれのテーマを全研究期間をかけて進行了した。

(1) 研究のための基礎資料(幼児・児童の英語能力データ)の収集・分析

(2) 研究の進展に伴い必要となる、データ収集・集計用ツールの作成: 授業時や家庭学習用の教材としての活用可能なものとなるよう配慮した。

(3) 授業実践支援や観察を通し、文字認識能力や教育効果の検討

4. 研究成果

所期の計画の中で設定した3つのサブテーマについて、それぞれ下記のとおり成果を得た。

(1) 幼児・児童の英語能力データの定量的な収集・分析：研究のための基礎資料の拡充を行うことができた。ただし、幼児のデータについては定量的な分析を行うのに十分な質・量を蓄積することができなかつたため、質的検討に留まった。今後、改善を加えた新たな方法論のもと追究を継続したい。

(2) データ収集・集計用ツール開発：以前の研究テーマにおいて作成したものに改良を加えて作成した。ただし、上記(1)に記述のとおり幼児データの定量的な収集に至らなかつたため、テーマ(2)の進捗は計画時よりも小さいものとなった。ツールの教育効果検証についても限定的なものに留まったため、今後も継続的に実践に基づいた改良を加えたい。

(3) これまでに実施した小学生や成人学習者を対象とした外国語音声の知覚・学習実験では、音声技能面の学習は短期的であっても集中的に実施する方が効果が高く、継続的に学習を行うと向上すること；英単語の聞き取りなどの個人的学習の要素の強い能力であっても互いに教え合ったり(協働学習)、エデュテイメントの要素を取り入れて競争的な課題として行ったりして実施する、その後、個別学習として実施した際にも学習意欲を高く保ったまま学習に取り組む可能性が高いことが確認された。生活や遊びの中で学ぶことを特徴とする、年齢の低い学習者であっても、同様の傾向を観察することができた。上述のとおり定量的な結論を導き出すには至らなかつたが、協働的・競争的な仕組みを取り入れながら、認知的能力・非認知的能力を刺激し学習対象を視覚提示・聴覚提示したり、繰り返し模倣させたりすることにより学習対象に積極的に関わり習得が進む様子が観察された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----